

4 宇部市の生活・文化にはどのような特色があるだろうか

みなさんは、「宇部市」と聞いて、どのようなことを連想するでしょうか。

2009（平成21）年に宇部市が市外在住者（サンプル数は広島・福岡の200人、東京・埼玉・神奈川・千葉の200人、その他道府県の400人、計800人）を対象に実施したアンケート結果によると、宇部市のイメージのトップ3は、「宇部興産・セメント」「特にない」「山口宇部空港」です。その他にも、宇部の特産品である「小野茶」「月待ちがにせんべい」、伝統産業である「赤間硯」、多くの参拝客でにぎわう「北向地藏尊」も入っていました。

ここからは、「宇部市の生活・文化」を通して、宇部市の地域的特色を考えていきます。

「生活・文化」とは、その地域の「言語」「伝統文化」「食事」「生活の様子」などをさします。つまり、「その地域では、どのような言語が使われているのか」「その地域には、どのような伝統文化（祭り・伝統産業など）がみられるのか」「その地域では、何が食べられているのか」「その地域の人々はどのような生活を送っているのか」というものになります。

（1）宇部市の方言

宇部市は、明治時代中ごろから、石炭産業の隆盛に伴い、他地方から多くの人が往来し、他地方の言葉も移入されました。また、首都東京との交通が頻繁となるにつれて、東京言葉の影響を大いに受けました。そのため、宇部方言もだんだん変化を遂げつつありますが、現在も残り、使われている宇部方言もあります。次のような言葉を、みなさんは使ったことがあるでしょうか。①～⑩の文章の意味を考えてみましょう。（答えは、次頁の下にあります。）

《宇部方言の例》

- ① この西瓜は、いかすぎて食べ切れんちゃ。
- ② テレビに夢中になって、編み物の手がおかえちよるでよ。
- ③ あいつは、おとんぼじゃけえ、甘えん坊じゃろうがや（ね）。
- ④ かがちに胡麻を入れて、れんぎで擦りよったそじゃーや（ね）。
- ⑤ この米を一寸水にかしちょってくれんかのう。
- ⑥ あいつはがんくうじゃけえ、金を出しゃーせんに一や。
- ⑦ あいつは酒を飲むだら、すぐぐでりだすけえ、付き会えんちゃ。
- ⑧ この品物は安もんじゃけえけないでよ。
- ⑨ こねえーに、じょうに買うて来てどねえーするんか。
- ⑩ この枕をすると、ぐと調子がええでよ。

※③・④の（ね）は、女性が使用する言葉の場合です。

(2) 宇部市の祭り

次の表は、宇部市で行われているおもな祭りです。自分が住んでいる地域の祭りもあり、参加した祭りもあるのではないのでしょうか。

行事名	開催主体	開催時期	開催場所
北向地蔵大祭	北向地蔵	1・8月24日	宇部市上片倉
中山観音縁日	廣福寺	2月18日	宇部市中山
百手祭	岡田屋百手祭保存会	3月最終日曜	宇部市岡田屋
黒岩観音例祭	黒岩観音	4月中旬	宇部市黒岩
新川市まつり	新川市まつり実行委員会	5月3～5日	常盤通り周辺
中津瀬神社夏越祭	中津瀬神社	6月下旬	宇部市新天町
琴崎八幡宮夏越祭	琴崎八幡宮	8月上旬	宇部市大小路
宇部まつり	宇部まつり実行委員会	11月中旬	常盤通り周辺
亥の子	東岐波ふるさと運動実行委員	11月中旬	宇部市東岐波

山口県ふるさとづくり県民会議編「山口県のまつり」から

ここで紹介する祭りは、宇部市上片倉で行われる「北向地蔵大祭」です。北向地蔵のはじまりは、1840（天保11）年と台座に刻まれています。室町時代に片倉に居を構えていた南方の地頭が、死んだ娘のために建てたと言われています。



大祭は1月と8月の24日に行われ、バスの臨時便は午前中、約30便もあります。北向地蔵を管理している人によると、平日には200～300人、休日には500～1000人が参拝しに来られます。毎月24日に開かれる縁日には、1000人を超える人々が遠方からも訪れ、年間で20万人前後の人でにぎわうそうです。

大祭の日には読経が行われ、地元特産品の物販も行われます。8月の大祭の夜には広場で盆踊り大会が行われます。盆踊りは自治会主催で行われ、地域の人協力して櫓を組み、運営をされています。地域の人と協力してお祭りを行うことで、地域の伝統文化を継承するとともに、自治会の人との結びつきを強めることにもつながっています。

北向地蔵の他にも、その地域の神様や仏様を祀る行事が、宇部市にはあります。このような行事に地域の一員として参加していくことが、地域の伝統文化を守ることにつながるのではないのでしょうか。

【盆踊りのようす】



【地元特産品の販売】



前頁の解答

- ①大きい ②疎かになる ③一番下の弟（妹） ④すり鉢 ⑤水に浸す
⑥けち ⑦酒に酔って、くどくど話す ⑧長持ちしない ⑨たくさん ⑩甚だ

(3) 宇部市の食

みなさんは、宇部市の郷土料理として、どのようなものを思いうかべるでしょうか。地域に伝わる食文化は、先人達から継承された知恵や、地域の伝統的な文化を継承するものでもあります。ここでは、宇部市周辺に伝わる伝統的な「食」を中心に見ていきましょう。

① 幽霊寿司(ゆうれい寿司)

吉部地区には特産の米を活かした「幽霊寿司」(「ゆうれい寿司」)という珍しい食文化が残っています。これは、白米が食べられることへの感謝をこめた押寿司で、色白の「幽霊」を表現するため表面に具材を置かないのが特徴です。幽霊の絵を色白で足のないように描くのは江戸時代以降ですので、江戸時代以降に作られた寿司と考えられます。明治時代の宇部市では、普段は主食として麦飯や大根飯、小麦団子、そばがき等を食べ、正月や盆、稲刈りなど、年間で限られた日だけ白米を食べていたと市史にあります。



② 竿まんじゅう

竿まんじゅうは、吉部地区で室町時代からつくられている餅菓子です。形状から薙刀餅(なぎなたもち)の別名もあります。もち米ではなく、うるち米の米粉を使った餅菓子は全国的にも珍しく、生地とあんのバランスもよく、いろどりの美しい郷土の菓子です。



③ 茶粥

山口県の瀬戸内海沿岸部では、江戸時代に紀州(現在の和歌山県)の漁師が伝えたと言われる茶粥が郷土料理として伝わっており、東岐波や西岐波では今も茶粥を食べる習慣が残っています。番茶で炊いたシンプルな茶粥の他、サツマイモや豆、かき餅、大根などを加えた茶粥もあります。



④ 宇部ラーメン

宇部ラーメンの歴史は、「炭鉱のまち宇部」としての歴史と密接なつながりがあります。石炭採掘の全盛期、宇部には各地から大勢の人々が炭鉱夫として移り住みました。ゆっくり食事をする時間も惜しい彼らにとって、手早く食べられるラーメンは自然と人気の食事となっていきました。宇部ラーメンの特徴は、濃厚でにおいの強い豚骨スープと中太麺をベースとした豚骨ラーメンです。2013（平成25）年、宇部市と宇部市シティーセールスパートナーの協働企画として「宇部ラーメンマップ」を作成し、宇部市内の多数のラーメン店が掲載されています。



「宇部ラーメン(<http://kusauma.com/>)」から

（４）宇部市の民話

民話とは、人々の生活の中から生まれ、人々によって伝承されてきた説話のことを言います。民話には、当時の人々のくらしや先人達の知恵、地域の伝統的な文化を色濃く残しているものが多いです。右の表は、宇部市に伝わるおもな民話です。この中で「身代わり名号」という民話を見てみましょう。

民 話	成立時期
宝くらべ	室町時代
身代わり名号	室町時代
北向き地藏様	室町時代
沖田のツル	江戸時代

いまから五百年ぐらいむかしの話である。

長門の国(山口県)須恵の黒石(すえのくろいし:宇部市黒石)に蓮光(れんこう)という お坊さんがいた。このお坊さんは、もとは武将で、名前を伊東順光(いとうとしみつ)といった。順光は室町幕府の六代將軍足利義教(あしかがよしのり)の家来で、武芸にすぐれ、將軍にも信頼されていた。ある年、順光に、悲しいできごとがづつぎと起こった。妻と子があいついで病死したかと思うと、今度は將軍義教が家来に殺されるという大事件が起きたのだ。妻と子をなくした悲しみも大きかったが、主君が殺されたというおどろきもたいへんなものであった。すぐさま味方の武将と力を合わせて裏切り者をうちはたし、主君のかたきをとった。先にいとしい妻と子をなくし、今また主君と別れてしまった順光は、生きていくはりあいをうしなつて、とうとう仏の道にはいる決心をした。順光から話をきいた本願寺の蓮如上人(れんにょじょうにん)は、順光の心に深くうたれ、弟子にむかえた。順光は、上人のもとで夢中になって仏の道を学んだ。

何年もの修行をつんだあと、上人に、「蓮光坊、おまえは西国(さいこく:今の九州地方)へ行って、仏教を広めてきなさい。」と言われた。そこで蓮光は、上人からいただいた六字の名号(南無阿弥陀仏(なむあみだぶつ)の六字を書いたもの)と木仏をもって、ひとり九州へ旅立った。

蓮光は、周防山口の湯田をへて、小郡から船にのった。船には、黒石の番所の富岡七兵衛(とみおかしちべえ)という役人が乗っていた。蓮光と七兵衛はうちとけ、はじめから兄弟のように親しくなった。七兵衛は、黒石に住むように熱心に蓮光をくどいた。蓮光は、九州行きに心をのこしながらも、黒石に住むことにした。

黒石の村に住むようになってから、田や畑であせを流している百姓(ひゃくしょう)や道で会う人たちに、蓮光はわけへだてなく声をかけ、元気づけた。人々の元気な姿を見ては喜び、病に苦しむ人を見ては同情をしはげます毎日をおくった。そのうち、黒石の人々は、「法師さま(ほうしさま:ほうさん)の顔は、わたしたちとはどこがちがうようじゃ。」「法師さまのおことばは、ほんとうにありがたいのう。生きかえるようじゃ。」と、蓮光を心からうやまうようになっていた。蓮光もまた、人々のかざりけのない温かさに心をひかれ、この村に住むことが本当に楽しくなっていた。

その頃の須恵の黒石は、厚東川流域(りゅういき)のよい港だったので人の出入りも多く、蓮光のうわさは口から口へと広がっていった。蓮光をしたう人々は増えるばかりであった。そんな蓮光をおもしろく思っていない者がいた。土地の僧たちだ。僧たちは、黒石をおさめる大内の役人に、「蓮光は、もともとは伊東順光という武将で、ひそかに大内のようすをさぐっているけしからん者です。」「蓮光の教えはまちがっています。」と、ありもしないことをならべた。そのため蓮光は大内氏の役人にとらえられた。役人は、いつも罪人をさばくときのように、ろくに調べもしなかった。蓮光は、「わたしが仏の道を歩んでまいりましたのは、実は……。」と、心のうちをあかそうとしても、役人はそんなことは聞きたくもないというふうに、「民びとをかどわかしたお前の罪は、たいへん重い。」と、打ち首の刑を言いわたした。横州の浜で首をさられることになった蓮光は、その日から、牢の中でひとりしずかに念仏をとなえるようになった。

いよいよその日がやってきた。刑場にむかうとちゅう、蓮光は、上人からいただいた名号を、役人の目をぬすんで中野(厚南区)の土地にうめた。刑場についた蓮光は、これから刑をうける人とも思えないほど落ち着きはらっていた。目をとじ、手をひざの上にのせて、刑をまっていた。やがて刑の時こくになった。役人は、しずかに刀をとって、蓮光の後にまわった。「えいっ。」役人は刀をふりおろした。刑場をぐるりとかこんで見守っていた村人たちは、顔をおおい、手をあわせた。念仏をとなえる村人たちの声がしずかにおこった。が、それはすぐにおどろきのどよめきに変わった。蓮光が、さっきと同じままの姿で座っていたのだ。もちろん首はそのままだ。首切役人は、青い顔をして、「これはいったいどうしたというのだ。」と、ふるえる手に力を入れ、また刀をふりかぶった。が、その時だった。「待てえっ、待てえっ。」大声でさげびながら、早馬が刑場に向けこんできた。城からの急ぎの使いだ。「その刑は待たれい。法師さまには罪のないことがわかった。この土地での布教はゆるされたぞ。」使いの声は、山やまにこだました。役人はあわてて刀をおさめた。ゆるされた蓮光は、走るようにして中野にむかった。うめておいた名号を掘り出すためだ。蓮光は、うめたあたりにつくと、急いで手で掘り返した。「あっ。」蓮光は息をのんだ。手にとった名号は“南無”の二字のところをふたつに切れ、真っ赤に染まっていた。話をつたえ聞いた村人たちは、なんでも、法師さまは、刀さえよせつけないりっぱな方だそうなの。「いや、もっとふしぎなことは、名号のほうじゃ。あの名号こそ、法師さまのみがわりになられた、たつとい(尊い)ものだそうなの。」うわさは国じゅうにひろがった。

それからというもの、あちらこちらから蓮光をしたってやってくる人がたえなかったという。そののち、名号を埋めたあたりにお寺を建て、蓮光法師をむかえ入れた。それが今の蓮光寺である。名号を埋めたといわれるところは名号塚といわれている。身代わりの名号は、今も寺の宝として、大切にしまわれている。

「山口の民話」より作成